

令和２年度 第１回昭島市環境審議会
会議録（要旨）

〔開催日時〕 令和２年８月１９日（水） １８：３０～２０：２５

〔開催場所〕 昭島市役所２階 ２０４ 会議室

〔出席者〕

- １ 委 員：亀卦川会長、長瀬副会長、臼井委員、内田委員、大嶽委員、堺委員、
田中委員、名取委員、二ノ宮リム委員、藤原委員、山本委員
- ２ 事務局：池谷環境部長、井上環境課長、渡邊係長（計画推進係）、光畑係長
（環境保全係）、秋元係長（水と緑の係）、橘主任（計画推進係）
- ３ コンサルタント会社：倉地、前田
- ４ 傍聴者：０名

〔欠席者〕

委 員：椎名委員

〔議事要旨〕

- １ 開 会
- ２ 議 題
 - （１）検討作業の流れの確認について【資料１】
 - （２）計画の枠組みについての確認【資料２】
 - （３）計画の基本理念等の検討について【資料３】
 - ① 新型コロナウイルス感染症への対応
 - ② 望ましい環境像、基本目標
 - （４）「昭島市の環境」について【資料４、５】
- ３ その他
- ４ 閉 会

〔配布資料〕

- 資料１ 令和２年度の検討作業フロー
資料２ 計画の構成案
資料３ 次期環境基本計画素案（たたき台）
資料４ 第１章 昭島市環境基本計画
資料５ 第２章 水と緑の基本計画

〔発言要旨〕

- １ 開会
事務局職員の異動について（新任職員の紹介）
- ２ 議題

(1) 検討作業の流れの確認について
(資料1 井上課長による説明)

- 井上課長： 新型コロナウイルス感染症の拡大により、令和2年度に予定していた会議等を予定どおりに開催することができず、環境審議会についても第1回を5月から本日に変更した。また、上位計画である次期総合基本計画についても、その策定スケジュールが現在不透明な状況にあるほか、新たに新型コロナウイルス感染症による影響を踏まえた施策を検討する必要性が生じた。このため、これまでのスケジュールを変更し、審議会からの答申を委員の任期となる令和3年6月、計画期間は令和4年度からの10年間とした。本年度は、合計3回の審議会を開催する予定である。なお本年度については、計画素案のパブリックコメントの実施までを予定している。
- 亀卦川会長： 当初予定より概ね3か月遅れ。計画年度が1年変わったことが大きな変更である。
- 大獄委員： 12月に令和3年度の実施計画に入れて、予算化することとなっただろう。議会への提案についてもずれていくと思うが、影響はないか。
- 井上課長： 今回の12月の実施計画には反映をせず、令和4年度の実施計画に反映することとなる。
- 大獄委員： 議会に対して、素案を説明するのはいつになるのか。議会に上程され、承認されていくのだろうが、影響はないか。
- 井上課長： 報告を行うのが後ろになる。答申を受けた最終の内容を議会に報告する。
- 大獄委員： この計画に基づき予算措置を講ずるものは、来年度の実施計画に反映し、再来年度に動いていくということを確認できた。

(2) 計画の枠組みの確認について
計画の構成案の確認について、事務局からの説明が行われた。
(資料2 井上課長による説明)

- 亀卦川会長： 全体の枠組みは「中間まとめ案」に基づいて設定されていて、水色のところを中心に議論を行うこととする。具体的な検討に入りたい。

(3) 計画の基本理念等の検討について

- 井上課長： 資料3について説明

①新型コロナウイルス感染症への対応

- 井上課長： 資料3の18頁で、計画改定の視点の(4)に新型コロナウイルス感染症への対応を追加した。今後、実際の施策は、これらの内容を反映させたい。この内容について、ご意見等をいただきたい。なお、8月5日に開催した市の庁内検討委員会では、今後どのような感染症が発生するかわからないので、新型コロナウイルスと特定しないほうがよいのではないか、という意見があ

った。事務局として「新たな感染症等に対応」という表現に変更するよう考えている。

亀卦川会長： 「新たな感染症等に対応する」という見出しとする予定である。

臼井委員： 新型コロナウイルスと特定しない方がよい。これから 10 年間の間に何が起るかわからない。いろいろな問題に対応できる表題にしたらい。

名取委員： 私も、新型コロナウイルスと特定しない方がよいと思う。気候変動を意識していることはそのとおりである。社会情勢からして、この項目を入れることは重要だが、環境基本計画の中でどう位置付けるかは難しいだろう。メインは、感染症対策部門で捉えることになるだろう。環境基本計画の中で関係するところを対応する必要がある。

井上課長： 環境基本計画に影響がある内容のみを抽出し、記載する予定である。

二ノ宮リム委員： 新たな感染症対応に係る環境分野の課題を入れるのは大切だが、書かれていないこととして、身近な自然環境がきちんと保全されていて、住民が活用できる形になっていること。三密を避けるため、人工物、建物の中には出かけられないというなかで、身近に自然環境が残されていて、人々がそこで過ごせることの重要性が明らかになったと思う。ぜひ明記してもらいたい。

井上課長： 重要なことと思うので、ご指摘の部分を反映するよう、検討したい。

亀卦川会長： 考え始めるといろいろなところに反映させることが必要。スケジュールはどうか。

井上課長： 随時情報収集をしながら反映してまいりたい。

大獄委員： 「このような視点から、環境施策の見直し・強化を図る」という記述があるが、これは、その都度計画を見直していくということか。

井上課長： 今回の計画の期間は 10 年間で、前期、後期と分けておりその中間で見直しを行う予定である。中間見直しや次の計画改定の際に、反映することができると考えている。発生ごとに見直すということではない。

大獄委員： 環境基本計画の中で自然に触れる、環境を身近なものにしよう、環境リーダーを育てるなどの記載があるが、コロナの中で自主的な活動が制限されている。例えば、市として多摩川での活動について野外のことなので大丈夫だという考えを示すことがあるかもしれない。規制をしていくことになってしまいが、コロナが想定外だったと対応が遅すぎることになるのは避けなければいけない。発生する都度、見直しをしていかなければいけない。部屋の中ではない外での環境とのふれあいを大事にしようとする考えはよいと思った。

井上課長： 環境基本計画そのものを直すのは、先程話したとおり。その時の状況をどのように環境行政に反映させていくかについては随時見直しをするとともに、毎年度、昭島市の環境で報告することも考えていく。

② 望ましい環境像、基本目標

井上課長： 資料 3 について説明

井上課長： 先日の庁内検討委員会が出された意見について説明する。バックキャスト、フォアキャストなどカタカナが多いのではないかという意見が出た。本文中に注釈を入れるか、巻末に用語説明を付けると回答した。バックキャストに

しても科学的根拠がなく、概念だけで考えたのであれば難しいのではないかという意見があった。これには、国や都等の目標値等を参考に、将来を予測し、まずはゴールを設定していると回答をした。また、基本目標の順番について意見があった。脱炭素社会や安全安心で持続可能なまちがこの計画の目玉となるが、昭島市らしい環境基本計画とするため、順番をどうするか。どこに昭島市が危機感を持っているのかを考えてもらいたいとの意見をいただいた。現在の順番は、現行計画の流れを踏襲した順番である。これについても委員の皆様のご意見をいただきたい。

亀卦川会長： 資料3では、昨年度の中間まとめに無かった、第1章の望ましい環境像、分野別の基本目標の案が出てきた。第1章の2頁の望ましい環境像について、意見や質問をお受けしたい。「美しい水と緑を将来の世代に」というのは、現行計画の環境像。これをどうするのか、新しい環境像を考えるにあたっては、5つの基本目標を見ていく必要がある。現行計画は自然との共生にフォーカスした環境像が提唱されているが、このままでいくのか、ということも検討する必要がある。

名取委員： 新しい計画であるということを示すために変えるべきだと思う。今の計画でも表紙に出ているので、変えていく必要があるとは思いますが、しかしこの場で、ゼロベースで作っていくのは難しいと思う。いくつか考え方を挙げてもらうとよいと思う。庁内検討会でも意見があったということだが、気候変動への適応やSDGsによる持続可能性を取り入れたことが特徴だと思う。それがわかるような美しい言葉があるとよい。

大獄委員： 気になった回答があった。バックキャスティングの言葉は当たり前捉えるようになっていく。この環境基本計画では、昭島市がどこを目指したいかということがあって決めていくことになると思う。先程の説明では、国や都があってからゴールを設定していくと回答したという。昭島市としての在りたい姿があり、そこから考えていく必要があると思う。代り映えはないかもしれないが、昭島市は湧水も減っているし、水のまちと言って流動調査をやるということで、やはり「水」は昭島らしさの一つだと思う。委員会でも議論があったように「人」でしょうということ。子どもたちのことや情報などに関連する協働を後ろに持ってくることが多いが、とはいえ人がいないとできない。この審議会にはSDGsの専門の先生が関わっているが、2030年に向けてどう行動するかが問われていると思う。コロナで、世界全体で大変な状況にあるが、昭島市としてSDGsの行動目標に合わせラベリングするのでなく、担当所管と連携、協働していくことが重要である。水は昭島市らしさであり環境基本計画の中でも特に見ていく必要があると思う。バックキャスティングの説明のところは気になった。

井上課長： バックキャスティングについて記載する際に、夢物語になってはいけないという趣旨で質問があり、それに対し、国や都の示している取り組みを参考に、昭島市としての目標を立てたと回答をした。国や都の方向性を書いたと申し上げたが、言葉足らずだった。

大獄委員： 是非、職員にどのようになりたいか描いているのかと聞きたい。夢は大事だと思う。職員の中でも、どう考えているのか。自治体の職員がバックキャ

スティングに対しカタカナが…という回答があったということで少し悲しいと。バックキャストは、一般の企業は当たり前だと思う。職員の意識としても共有してもらいたい。

内田委員： 似たような意見かもしれないが、SDGs はそれだけ見ていると掴みどころがない。国から地方自治体に下りていくにしたがって具体的になるのだと思う。全体的にやろうとすると、力も薄くなってしまうと思う。市としてはこれから本当にやらなきゃいけないこと、話は分かるが直ぐにできないことを分ける、国や都よりももっと独自に推進してやっていきたいということがあってもよい。その方が、一般市民の方にはわかりやすい。例えば、プラスチックの削減の取組がある。スーパーでの小さな袋の消費がかえって増えているというが、それでは何も意味がない。「自分で容器を持っていきましょう」など、そのような運動を盛り上げていく、応援していくことが必要だと思う。

井上課長： 全てを取り組むと薄くなるということなので強弱を付けながら計画に反映を考えたい。昭島市では、プラスチックー1 運動というクリアファイルの新規作成廃止等の運動や、フードドライブにも取り組んでいる。市が特に力を入れていくことは計画に反映していきたい。

内田委員： 市としてこういう方向に持っていきたいということになったら、市内の団体に協力してもらおうようにするとよい。言葉は悪いが利用するとよい。市民からも情報を募るなど。これまで、委員会等を作るが途中でわからなくなり、結論が見えないということがあった。重点的に決めてしまった方がよいと思う。

山本委員： 基本的なことに気が付いた。バックキャストやフォアキャスト、望ましい環境像は、「持続可能」をどう捉えているかがとても大事な気がする。その概念は、いろいろなところで言われている「持続可能」なのか、50 年後の未来を得ようとするその「持続可能」なのか、誰にもわかるように書かれていないと思った。数値としては、何パーセントにするということは伝わるが、「持続可能」と言われたときに、それぞれの人によって異なる。意識のレベルや、自分の困っている現状をとらえて「持続可能」を捉える人もいる。市が50 年後の私たちが得たい「持続可能」な未来は何かを提唱してもらえれば、私たちに落ちる具体性が見えてくると思う。

井上課長： 会長との打合せの中でも、そもそも人口をどう捉えているかもあるのではないかと、との意見をいただいている。最初の概念的なところを記載し、持続可能な社会をどう描くか、基本的な部分や背景を記載したうえで、ゴールを示し、バックキャストで考えるという流れとすることを考えていきたいと思う。

二ノ宮リム委員： 持続可能性というのは、言葉だけでは捉えきれないと思う。望ましい環境像の中に「持続可能」という言葉が2箇所出てくるが、「安全安心で持続可能なまち」に収れんしてしまう印象を受ける。気候変動に適応することだけが「持続可能」と、昭島市が捉えているように見えてしまいかねない。ここだけに「持続可能」を使うことは考えた方がよい。「美しい水と緑と将来の世代に」の言葉に「持続可能」を続けていくのか、または昭島市が捉える持続可能性を示す必要があるのではないかと。もう一点、環境活動のところで、

持続可能なライフスタイル、協働の取組とある。持続可能な消費や生産が定着しています、とあるが、非常に限定的なライフスタイルの捉え方かなと思った。個人個人があるものの中から良いものを選択する暮らしというのは、狭い範囲で今ある社会構造の中で個人に責任を期するような持続可能性の捉え方だと思う。SDG s の理念についても触れているが、様々な課題を総合的に解決するための行動を起こすことが必要です、という文章に表れている。今あるものの中から選ぶという狭いレベルのものでなく、世界を変えていこうという目標である。今ある社会構造を変えることを目指している。市としては、市民一人ひとりが持続可能な社会のあり方について考えたり、その考えを表明したり、話し合うことによって市のあり方を作っていくような場の創出なのかと思うと、環境活動や全体を通じて市民が主体となる場作りや、社会構造そのものや市の仕組み、組織、制度を見直していくことが必要だと思う。環境の分野を外れていくことも出てくるが、今あるものを変えていくという心意気や姿勢、未来像が見えるような示し方をすることが基本になければいけないと思う。

井上課長： ご指摘の箇所の表現の仕方については、検討していきたい。SDG s のところも含めて検討したい。

大獄委員： トランスフォーミングということが言われている。これからの変革をしていくことが SDG s である。ラベリングをしてやっています、という次元ではない。環境という切り口から、新しいまちづくりをやっていく必要がある。12 頁の記載はそのとおりだが、世界とつながっていること、トランスフォームということも書き込んでいかないと、夢物語と言われてしまうのだろうと思う。1 頁は、違和感を覚えていた。言葉の説明だけで、昭島市としては何を描いているのかがわからない。計画なので、市民と一緒に目指していく姿なので、文字面だけでは正直に言って読み取れないと思った。バックキャストの図はよいが、夢の部分について、どういうものを目指していくか、市民も一緒にワクワクするようなものにしなければならない。この計画は行政が作っただけで終わりではない。市民が自分も起点だということで意識し行動していかないと何も変わらない。市民と一緒にやっていこうという意気込みを書いてほしいと思う。それは委員会でも出ていたと思う。

池谷部長： 是非、いい言葉を出してもらいたい。うちに帰っていただき、こんなことを思い付いたという言葉がもしキーワードとしてあれば、是非、事務局にも寄せていただきたい。そこを求めていきたいと思っている。

亀卦川会長： 望ましい環境像として意見があった。宿題としては、脱炭素社会、気候変動適応、環境活動を重視したいという話があった。そのような箇所について、キーワードが出てくるとよい。持続可能の記載について配慮が必要ということであった。

亀卦川会長： 次に基本目標について、ご意見ご質問等をいただきたい。

大獄委員： 地下水の保全に関する条例を作るかどうかは環境審議会で決めることになっていた。どこに記載されるのか。

井上課長： 28 頁は、次回にご審議をいただく内容としたい。本日、ご審議いただきたいところは、第 4 章の網掛けの部分。目標値や施策については、次回にご審

議いただきたいと考えている。なお、先程私からフードドライブやプラスチック 1 の話をしたが、あくまでも施策に該当するような話であった。

亀卦川会長： 事前打合せの段階では、エコロジカルネットワークということで、水・緑以外に、生き物のことも考えようということで、生き物の生息場所を地図に落としていたりして、緑の連続性が生態系の保全にどのように役立っているかという視点を入れてはどうかとコメントした。

二ノ宮リム委員： 水と緑を通じた連携・交流についての文言がシンプルでわからない。また、「水と緑を通じた連携・交流を促進する」とは具体的などのようなことで、「持続可能な利用の機運」とはどのようなことを想定しているのか。

井上課長： 27 頁の目標・指標で挙げたとおり、散策マップの作成と活用などの取組もあるのでブラッシュアップしていけるとよい。また、生物多様性の保全と持続可能な利用の機運が、というところは、協働や市民の方の意識を醸成する、学習保全活動に積極的に参加していただくなど、そういったところが持続可能な利用だと考えられる。昭島市の生物多様性が保持されるよう、協働で活動していただきたいという意味合いである。また、シンプルだというご指摘なので、丁寧に書いていくとよいと思う。

二ノ宮リム委員： 具体的にどういうことを目指して、何を目的とするかを書き込む必要があると思う。環境活動への参加ということであれば、身近な自然環境が暮らしと密接に結びついていくような生活環境やライフスタイルの創出をするような市にしていくといった表現ができるとよい。「持続可能な利用な機運」とすると、利用だけが持続可能ならよいのかということとそうではない。地下水の管理や調査など利用以外の部分がどうでも良いのかと捉えられてしまわないか。市民が参加するというのは、利用者や消費者としてだけでなく、身近な自然環境を管理したりウォッチしたりしていく存在でもあると思う。

大獄委員： 「持続可能な利用」が引っかかっていた。前半でノーネットロスのことを書いていて、さらに注釈でノーネットロスの用語説明がある。この内容だと、ノーネットロスの説明にとどまっている。言葉を足して、なぜそこを目指していくのかというストーリーを持たせた方がよい。

井上課長： ご意見を参考にしながら、背景や市の取組がわかるような形で書き直しをしたい。

山本委員： 目標・指標やエコロジカルネットワークなどを見ていると、市民が受け身で、行政がやっていくと読み取れてしまう。一緒に創り上げていくという何かが、ことごとく入っているとよい。これだと依存してしまうと思う。市が頑張ってくれるから、市民はついていけばよいのだなと思ってしまう。何か言葉がほしい。

井上課長： 行政が一人よがりに書けるものではないと思う。今のご意見を参考にしながら、市民協働が前面に出せるよう検討していく。

亀卦川会長： 生活環境の確保のところについて、見てもらいたい。出ないようであれば、40 頁の部分もお願いしたい。

二ノ宮リム委員： 健康で快適な生活環境を守るまち、とあるのであれば、コロナの関係から、自然環境を豊かに保全していくことが、健康で快適な生活環境につながると

ということが書けるとよい。2つの基本目標に重複して出てくることになると思うが、つながっていることを表現できるとよいと思った。

井上課長： 素案としては環境基準の数値を前面に出した考えで作ったが、ご指摘のとおり、身近な自然環境のありがたみという部分も追記できればと思う。

二ノ宮リム委員： 市民が活用できる、市民が立ち入って活動できる身近な自然環境がどの程度あり、整備が進んでいるのか、ということを示すこともあると思う。

井上課長： 基本目標1と重複してしまう部分があるので、上手く棲み分けができるように検討してまいりたい。

大嶽委員： 健康で快適にという内容に関して、昭島市ではクールスポットを作っている。水と緑は快適にもつながっている。それが読み取れるようなことが無かった。給水スポットを作っている中で、熱中症対策にもなるし、市民が使えるようにする必要がある。

井上課長： 給水スポットについて、今の素案では触れていない。給水スポットは、基本目標1で取り上げることもあると思う。

池谷部長： このつながりは、昔の環境施策を凝縮したような作りになっている。それに対し今おっしゃったような視点はここには入っていない。ここに入れるのがよいのか、他のところがよいのか、お時間をいただき考えてまいりたい。

大嶽委員： ペットボトルの水は、マイクロプラスチックが入っていると言われている。ペットボトルの水を飲むというのはそれが水の中にも溶け込んでいて、飲んでいる。そこに出てくる化学物質がよくない。せつかく給水スポットを作るのであれば、ペットボトルではないものを考える。生活環境を守るという視点を取り入れる。市独自の視点でもよいと思う。

井上課長： 基本目標2で触れるか、基本目標3で触れるかは悩ましい。今後、目標、指標、施策の方向はご審議いただく中で、検討してまいりたい。

名取委員： 「健康で快適」という言葉は、広い意味合いの言葉なので、全てに関わるとも感じた。池谷部長がおっしゃるとおり、基本目標2はいわゆる公害分野をまとめたものなので、一つの整理方法だとは思う。一方で、「健康で快適」というと、範囲が広がってしまうので、工夫していく必要がある。

大嶽委員： 会長にお聞きしたい。40頁の温室効果ガスの目標値は、書きぶりとしては、このようなものなのか。

亀卦川会長： バックキャストでは、2050年頃については、東京都のゼロエミッション東京戦略で掲げられている目標になっている。世界的にも2050年をほぼゼロに持っていけないと、気候変動の被害が凄いことになると言われている。国の削減目標に向けたいろいろな対策を基に、昭島市に当てはめたときに行けそうだということで、妥当だと認識した。

大嶽委員： 順応的管理と記載がある。状況が変われば、順応的に計画が変わるよと読み取れるが、市としてどう考えていくのかがわからない。昭島市の第5次総合基本計画では達成可能な数字を挙げていた。気候変動に力を入れていると指摘した割には、出来そうなことを書いて、状況が変わったら変わるよと読みとれてしまう。

井上課長： バックキャストとして、2050年にCO2実質ゼロを目指して取り組んでいくことを記載した。順応的管理については、フレキシブルに対応するというこ

となので、しっかりと適応策を講じたうえで柔軟に対応していきたいという記載である。安易な目標のみを掲げるような考えはしていない。

名取委員： 順応的管理というのは、やや違和感を覚えた。生態系のような不確実性が大きいことについては順応的管理と言われる。温室効果ガスをゼロにすることに対して、順応的というのは言葉の強さと合わないという印象を受けた。生態系保全や適応策については、順応的管理はマッチする考え方だと思う。

井上課長： 順応的管理という言葉を使うかについては、ご指摘を受けて検討させていただきたい。2050年に実質ゼロ本当に実現できるかというのは、革新的な技術開発が必要であり、それを前提に、昭島市としては柔軟に対応するという趣旨で言葉を使った。この表現が適切かどうかは改めて考えたい。

名取委員： つまり、単に柔軟にというより、不足があれば野心的に取り組むという、より前向きな意味合いが表れている。

池谷部長： 従来の取組の延長だけでは実現困難で革新的な技術開発が必要となると記載されている。もしこれが実現できた場合には、計画策定の考え方を踏まえて順応的に管理する、という意味合いで捉えていた。言葉の問題があるので、少し検討したい。

亀卦川会長： 経路が明確にならないとバックキャストにならない。経路に不確実性があるので、変動をみながら調整しますという意味になるだろう。

井上課長： ここで順応的管理を使うかは検討したい。

亀卦川会長： 47頁で適応の話が出てくる。53頁の辺りもご意見をいただきたい。

名取委員： 適応策に関しては、順応型管理がマッチすると思う。温室効果ガスの削減目標が30%削減とバシッと書いてあるのに対して、適応についてはふわっとしている印象を受けた。科学的知見が入ってくると思われる。

亀卦川会長： 少し弱いということか。

井上課長： 力を入れていく部分なので、もう少し具体的な書きぶりを検討したい。

大獄委員： 適応策に関しては新規の事業ばかりなので、目標値を書きやすいのではないかと思う。バシッとどこまで取り組むのか、基本目標に書いていくとよいと思った。

井上課長： ここでの「新規」の表示は、環境基本計画に載せるのが初めてという意味である。例えば、ハザードマップはこれまでも取り組んでいたが、環境基本計画では新たに取り上げるため、新規と表示した。具体的には次回の審議会で検討したい。

大獄委員： 他部署の所管する施策を環境基本計画に取り入れることは、気候変動に対して全庁的に取り組むという意思表示をしていくということになる。であれば、関係部署の数値目標と整合させるとよく、このままではもったいないなと思った。災害時の井戸の確保などと活字で書くのは初めてではないか。職員の方も気候変動が肝だという意見があった割には、薄いなと感じた。

二ノ宮リム委員： 基本目標4で「適応の視点を取り入れることを目指します」という言葉が漠然としている。関連するが、2頁の望ましい環境像のところで、レジリエンス（速やかに回復する力）を掲げているが、大事なポイントだと思う。レジリエンスの視点を前面に出してもよいと思った。レジリエンスを推進して

いくにあたり、施策を見るとハザードマップや市民の避難行動の周知などが挙げられているが、人間に関わる部分は非常に重要である。市民が単に周知してもらって、それに従って行動をすればよいというのではなく、市民のネットワークづくり、誰がどのような支援を必要としているのかを把握するなど、他部署との連携のもとで進めることが重要となると感じた。

二ノ宮リム委員： 基本目標5で「みんなで協力して将来を担う人材を育成するまち」という表現と、ブルーの網掛けの内容がリンクしない。「将来を担う人材を育成する」という表現だと、子どもたちに対する教育が前面になってしまう。子どもだけでなく、大人も含めた市民が主体的に行動できるよう、体制づくりや場づくりが含まれると思う。また、「育成」というと上から目線にも感じる。「市民の力を発揮できる場づくり」のような表現がよいのではないか。

井上課長： レジリエンスに関してだが、地域防災計画でも水害についての書きぶりを変えている。連携しながら、目標に反映をしていきたい。一方で、53頁の基本目標5の「将来を担う人材を育成するまち」のフレーズと網掛けの内容がリンクしていないというご指摘であった。市としては、「将来を担う人材」は、現在活動していない方が、将来的には一緒に活動していただきたいという意味で使ったつもりである。とはいえ、ご指摘のとおり一緒に協働して取り組んでいくという部分が分かるような書きぶりに変えていきたい。

堺委員： 会議に出ているとすごく思うし、読んでもすごく思うことがある。皆さんは環境のことに詳しいが、国が今言っているような横文字が多いと感じる。もちろん、皆さんは知っているからわかる。しかし、普通の市民はわからない。難しく書くところがあってよいが、本当に訴えたいことは、何も知らない人にここだけ読めばよい、これをやりたいんだよ、ということをやさしく丁寧に強弱を付けてもらいたい。アイコン化することもあると思う。若い世代に読んでもらえることは、大事なことだと思う。市民は読まなかったとなると切ない。

井上課長： 「バックキャスト」についても、読み手の立場に立って書くべきというご意見をいただいた。素案以外に概略版を作るのか、素案のなかで表現するのか検討したい。

亀卦川会長： 「レジリエンス」もそのようなものだ。

大獄委員： ビジュアルのように表現することもあると思う。市民と一緒に描きながら実践するようなこともあってよいのではないか。市民が持ち歩くハンドブックのようなものにしてもらいたい。わかりやすいというのは大事。よそ者のように感じられてしまう。

井上課長： 2頁目の望ましい環境像のところもアイコンで表示することがあると思う。

田中委員： 私も環境に20年以上関わっているが難しいと感じる。一生懸命、長年呼びかけているが、やはりもっと市民が拠ってこられるようにする必要がある。以前は、毎週水曜日に東京都の環境学習に参加したが、やはり魅力があった。今、そのようなものがない。「育成」というと、頭から言われている気がする。また行きたいなと思えるような計画を是非、作ってもらいたい。

井上課長： みんなで描いた環境像を実現するための計画とするべきだと思う。

内田委員： 何をしたいということがあるが、基本は全て教育の問題だと思う。なぜこういうことを言っているのか、こういうことをやりたいなということ、どうやって評価するのか。市の環境に携わってきたものからすると、最後の評価が甘すぎる。前回の審議会のときに、市長から諮問があったのは、環境部でやっていることを評価してくれと言っていた。環境部の仕事はたくさんあるが、市ではどうやって評価しているのか聞いたところ、予算を達成したかしなかったかで判断しているという。民間の事業所にいた者からすると、金を使ったのは分かるが、使った結果がどうだったかを評価しないと、甘くなってしまう。分科会や検討会に呼ばれていくが、最後まで結論が出ないうちに終わってしまう。教育のところにも関連するが、どこまでやっていくのか評価できないと、何年たっても進まない。そういう意味でこの教育は、本腰を入れて検討していかないといけない。具体的にどういう風にやっていくのか、本当に考えた方がよい。

藤原委員： 自治会で長く活動してきた。防災では、それなりの成果があったと思う。これからは、自治会も環境にもっと取り組んでいかないといけないと思う。防災の取組は、当初は地震が主だったが、今は水害が主になってきた。なぜ取り組むのかというと、自分の身近な問題として捉えられたからだと思う。こういう現象が身近に起きている問題ということ伝える必要があると思った。みなさんがやる気にならないと、広がっていかないとと思う。

二ノ宮リム委員： 基本目標5に「地域に根差した環境学習の活発化」とある。「環境に配慮した生活を実践し、地域の環境保全活動に参加できるよう」とあるが、市民を受け身の存在として認識していると思われる。「環境に配慮した生活をしていないから、配慮して生活してくださいよ」というメッセージに受け取られる。一人ひとり、自分の生活でいっぱいだろう。市民の一人ひとりが困っていること、不快に感じていること、身近で困っていること、又は楽しめることを伝える。ペットボトルを買うな、持ち歩くなと言われても、そこにあって便利であれば皆買うと思う。そうではなく、給水スポットを使うと、どのような楽しく素晴らしいライフスタイルになるのかがないと取り組めない。生活の主体者として、どういうことが楽しいか、どういうことが素敵だと思えるかということから、市に問題点を指摘していくような環境教育や環境学習の仕組みづくりが必要なのだと思う。市民の実感、市民の生活から捉えた環境教育・環境学習を進めるとよいと思った。

井上課長： 基本目標5を最後に配置しているが、重要なものと捉えている。ご意見をいただいたが、一緒に考えていきたいということで、より取り組みやすい形で計画に落とし込んでいきたい。

亀卦川会長： 全体を通じて、質問や意見はあるか。

山本委員： みなさんのご意見の中で、基本的に計画を立てるのは、現状を変えていこうという認識のもとに計画を立てるわけだが、今のままではどうしていけないのということが網掛けの部分に入っていない。漠然として掴みどころがない。例えば、レジリエンスは色々なところで使う言葉である。例えば、へこたれたときに、立ち直る力、あなたの力を信じているね、立ち上がってねというときにレジリエンスという言葉を使うこともある。何らかの力が必要だ

という現状があるという警鐘を鳴らす言葉がほしい。だから一緒になって考えよう、できるだけ楽しく、わくわくして取り組めるような配慮があるとよいと思う。

井上課長： 今のままではだめだよというところは、1頁の望ましい環境像の中で、今のままではこうなってしまうから、ゴールを決めて、こういう計画を立てたんだ、という書き方のほうが分かりやすいかと。

山本委員： シンプルに伝えられるとよいと思う。

亀卦川会長： 現状と課題がまとめられているので、そこが基本目標につながりを持たせた流れにするとよいと思う。

亀卦川会長： 2頁に記載されているレジリエンスは確かに重要なキーワードである。気候変動による影響があったときにそこから回復することは大事である。しかし、そもそも気候変動を回避することが重要であり、レジリエンスだけが先に行ってしまう印象である。回復だけに焦点を充てるのはいかがかという印象を受けた。

井上課長： 45頁に適応策の記述もあるが、踏まえて検討してまいりたい。

(4)「昭島市の環境」について

渡邊係長： 例年は、資料4・5についてご審議をいただいていた。今年度は、計画内容について貴重なご審議をいただいたので、資料の配付をもって説明に代えさせていただきたい。疑問点などがあれば事務局まで連絡を。製本したものは、次回の審議会でお配りする予定である。その時にも、ご意見をお寄せいただきたい。

3 その他

井上課長： 事業者意見交換会は、3月に環境配慮事業者ネットワークの全体会議に合わせて開催する予定としていたが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため中止となった。この度、9月4日に開催するネットワークの総会に合わせて事業者意見交換会を開催し、そこでご意見をいただけることとなった。計画の改定に反映させていただきたい。

井上課長： 次回の環境審議会は10月2日（金）午後6時30分から、昭島市役所1階市民ホールで開催する予定である。開催通知は、後日送付する。ご予定をいただきたい。

亀卦川会長： 委員さんの宿題ということで、資料3の2頁について、キーワードでよいので、意見を出してもらいたい。

4 閉会